天皇杯を受賞して15年
石井賀孝氏を訪ねて

聞く人

北海道立林産試験場
副場長 古田昭司さん
指導部長 高橋弘行さん

北海道林産技術普及協会
常任理事 小野寺重男さん

石井さん（石井林業株式会社社長・本別町）は昭和44年第８回農業祭で，林産部門では北海道ではじめての「天皇杯」を受賞された。

幹線林道と作業路を密度高く整然と設け，造搬作業の機械化や跡地の造林作業の効率化をはかる一方，「林分施業法」を積極的に導入するなど，林業経営の優れた業績を評価されてのもので，さらに58年春の叙勲では勲五等瑞宝章を受けられている。

……最近は天皇杯を受けた方々の集まりはないのですか。

いや年一回あります。昨年現地研修で私の山に来てくれました。茨城の宇佐見正昭さん，彼とは妙に話が合いましてね。あの人達は偉いですよ，会って話をしてね，ああなると信念だなぁ，カラマツ問題にしても，かえって彼等のほうが北海道のカラマツを，身近かにある我々より高く評価しているのでないですか，そんな印象を非常に強くうけました。

楽寿会

私は明日，信ずる者だけでカラマツを見直そうという仲間５，６人と集まるんです。楽寿会という，存命の喜びをもって生きる，自然の恩恵を大いに受けるということで，それぞれの山を見て歩くのです。篤林家の山ですから良い面も，悪い面もありますけど，彼等の迷わない姿勢ね，現実の流動する社会に対して迷わない，脱帽したいようなことをやっていますよ。「間伐技術指針」をもうとっくに乗りこえている。それ以上の対応を自主的に，創造的に，探求している人ばかりですわ。

高密度路網

……石井さんの高密度路網の森林施業はいつ頃からですか。

昭和25，26年頃でしょうか。カラマツ造林が発足した当時でしょう。その前は私は炭焼きですから皆伐ですよ。今のような大面積ではないけれども，そのままほったらかしておく，そういうことに納得できないものがあるんですねぇ。しかし，それが何だか分かりません。その時，足で道有林も私の山も全部歩きました。今，木材業者だとか造

材業者だとか言っておっても，いづれこの山に踏みとどまって，真剣に考えねばならないと思いましたが，その方法，手段が分からない。

国有林がぼつぼつ風倒木処理をやっていた頃，ずい分現場を見て歩きました。その時，考えたことは，一本の道をトラクターで何百回も歩くでしょう。トラクターをもって行けば自ら道になるんですよ。当時は林道規定によって，キチットした道でなければ認められなかった。それで，私はほかの山では実験出来ないと，幸い私の二次林の山があったから，これでやってみようということで，それが林道の初まりですよ。当時は誰も関心をもっていませんでした。ただ，小林庸秀さん，あの人は力になってくれました。「お前の考えは良い」とね。

中野正彦さん，湊武さんもそうです。三枝三郎さんが副知事の時だ。道費単独，生産林道，あれをどういう林道を作れば良いかということだ。林道規定でつくることを，私は真っ向から批判していたんだ。そんなものは駄目だ，経営の中にとり入れる道ではない，高過ぎる。昭和42年に，いまの作業道の補助体系の原型みたいなものが出来たと思いますよ。車が通れば良いんじゃないかとね。初めての道担の生産林道，北海道の林道の最初は小林さんで，それをスタートさせたのは中野さんですなぁー。いわゆる林業近代化への歩みを方向づけたのは，このお二人だと私は思いますよ。

林業道

それに目をつけたのがドロ亀さん（高橋延清氏）だ。道のつけ方は，「安く」できて，人に対しても山に対しても「安全」で，奪うだけでなく，より多くのものを与えるための「機能的」なものでなければならない。この３つが，今でも標語になっているようですなぁ。

当時のように，ただ奪うだけのものであれば，それは邪道だと思う。いわゆる“林業道”の道ではない。

高橋延清先生との出合いも全く不思議ですよ。林分施業法という理論は研究しておられたでしょうが，本としては出してはいなかったでしょう。山を歩いていて「これが私の求める山だ」と言って，私の手をぎっしり握りました。その純真さと言いますかね，私も心をうたれました。

当時，オーストリアのハフナー博士が東大で講演して，日本の林道について批判していますよ。余りにきれいで，立派すぎて金がかかり過ぎると。東大から送られてきたハフナー博士の講演資料と，私の考え方が同じなんだ。

私は疑問をもっていて，自分の山だから自由だ。自分の良心に従って行動しようと。これは国有林や道有林では出来ませんよ。それが，たまたま万年野党がいつの間にか与党になってしまったんですよ。昭和44年の時にね。

……計画的に路網をやり出したのは何年からですか。

昭和30年からです。天皇杯を受けたのが昭和44年，ha当たり170ｍです。

天然林施業

……話は，林道の話から天然林施業に移りますが，今のような林分施業はいつ頃からでしたか。

これは，道をつける前からの私の考え方，それがたまたま高橋先生との対話で自信をつけたわけです。先生のこれをするには道をつけなければ駄目だと，お互いに相足らざるものを補った。実際に始めたのは昭和36年頃です。

林業の機械化

風倒木処理をやりながら機械化林業でなければ駄目だと思いましたよ。当時工場を２つか３つ建てる位の機械化設備をやりました。500万円もあれば１工場出来る頃でして，1,500万円位かけてク

レーンだとかトラクターだとか買い入れました。当時，裕福な町村にトラクターが１台か２台ある程度だった。ブルトーザーを入れたのが，昭和34，35年だったでしょう。その前にボロボロのブルを入れて風倒木処理をやりました。

今でも想い出しますが，池田林務署は風倒木処理が終ったと道に報告を出していたんですよ。それは採算のとれる所だけ終ったということです。小倉政平さんが道有林課長だった。「あるのか」「ある」。「枯損でも何でも処理しようじゃないか」というわけです。

……32，33年前の昔ですね。私は当時の林業指導所に兼務していて，簡易鋼線集材装置をやり（指導所時報１，昭和26年３月）まして，この製品をいち早く買ってもらったのが石井さんです。

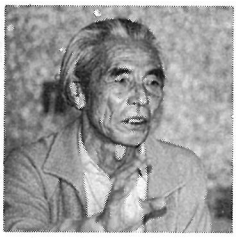
鋼線集材をやって，それぞれ効果がありましたよ。そういうことで，風倒木の後処理で40万石出しまして，お前のお蔭でこんなに道有林が儲けさせてもらったと言って非常に感謝されましたよ。道をつけ，ブルトーザーで集材してトラックで出す。昔のＧＭＣだ。林業の機械化というのは，その時ですよ。

貴化施業

間伐技術指針は技術の頂点ではないと思います。そうすると貴化施業なんです。カラマツの未来に対して，何らかの手をうたねばなりません。我々がそういう基盤をきちっと作っておかねばならない。そうでないと，北海道のカラマツは駄目になってしまうという私の考えですよ。

私は，早稲田収さん（林試北海道支場育林部長）の考え方が非常に良いと思っています。あの方は，北海道の林業に対して新風を吹き込んだですね。私は，あの方が来ると，そのまま帰すのが惜しいように思います。私は，あの方によって大変啓蒙されました。貴化施業の考え方も先生によって自信をつけられました。

従来の貴化施業は，国を初めとして生長量とか，蓄積とかいうことであったが，私は満足出来ない。早稲田さんは，「森林とは何ぞやという原点に帰って問い直さなければならない，森林とは価値を作ることだと。金銭的な価値ばかりでない，公益的機能も十分あり，そういう総合的な価値をつくること，どういう形でそれを追求するかということ，育成し収穫することである。」と言われている。これは正論ですよ。



……しかし，大勢を占めるにはほど遠い状況ですね。

いや10年過ぎれば，皆こうなります。高橋先生の林分施業法だって，当時は四面楚歌だったよ。

現在は短い，未来は長いですよ。この長い未来に私共は考えを新たにしなければならない。

五高林業

……石井さんの言われている五高林業とは何々ですか。

高蓄積，高生産，高品質，高伐期，これが今までの四高林業，これを高路網で裏付けしなければ，経営上絵に書いた餅になる。私の170m/haは当時学会でも随分問題になりましたよ。こんなに道路を抜いて過剰じゃないかと，今カラマツの間伐に入っているが，当たり前の状況なら全部不採算林分ですが，高路網のお蔭で十分ペイします。

カラマツ問題

この間，叙勲をうけたとき，横路知事が私のテーブルに来られましたので，貴方は一村一品運動というのをやってますけど，林業の一村一品運動はシイタケ栽培なんかと違うぞ，20年間待ってくれ。そうすれば格好つくだろう。それまで荷物になるかも知れないよ。

それまでに嫌気さして，これを捨てるようなことがあったら，とんでも無い話だ。20年間辛抱してもらう。必ず，我々の林業というのは，むしろ世界に向って誇りうるものだと言ったら，分かりましたと言ってました。

林道は一般化した。しかし，これからの北海道のカラマツをどうするんだ。従来は，統計資料を見ても，蓄積がこうだ，年生長量が何んぼだとか，質の問題が少ないでしょう。これが私のカラマツ

問題に対する疑問なんです。

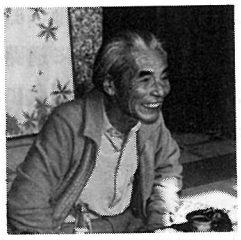
私は，カラマツの研究は旭川の林産試験場が世界的な水準をいっていると思います。このエネルギーと，毎日カラマツを撫で育てている林業家との間の対話をもっと密接にしなければならない。

林業家は独自の路線を進んではいますが，一体それで良いのか，というのが一つの問題。私は，これを誰に訴える術も今ありませんし，「まず隗(カイ)より始めよ」と，自分の山でこの問題を実証してみようというのが貴化施業の初めです。もっと高品質で，需要者が喜んで使えるようなものを造るのが，林業家のこれからの使命でないかと，後継者達にカラマツの林の中で話をしている。

量的なものは自然の限界がある。しかし，質的なものは人間が関与する重大なポイントである。

カラマツは，天恵の資源だと思う。いい加減に取り扱ってはならない。カラマツは，北海道林業の救世主だと思います。

カラマツの天然更新



……天然更新もありますね。どれ位になりました。

そう，カラマツの天然更新も，もう12cmになっています。北海道で天然更新はできないと言うが，冗談でない。条件さえよければ，天然更新も可能ですよ。実例が示しています。

緑の道場

北海道において素材生産，造材業はあるが，それは林業のすべてでない。今までは自然で出来たものだから，ランク付けし，価格をつけ，製材工場はそれで間に合いましょう。しかし，これからは，需要者が求めるものを我々は造ることが出来る。これが林業ですよ。立方米当たり５万円するものも，10万円するものも，１万円にならんものもある。しからば，我々は10万円するものを造ろう。これは枝打ちなんですね。そういうものを造るのが，次の世代の使命でないかと，若い者にクドいほど話しています。いわゆる林業道だよ。

……石井さんの山は林業道場と言うのでしたか。

いや，緑の道場です。自分の信ずる最高傑作を出そうというのが，石井山林に対する営みなんです。

……戦前植えたんですか，随分太いのがありましたが。

樹齢58年で胸高直径73cm，枝打ちは20mまでです，69cmが一番小さい。私は，これによって啓示をうけている。山奥に貴化木とは，こういう木だというのがありますよ。

川下の情報を川上に

……試験場に対する提言をお願いしたいのですが。

私は黒田一郎先生からも大変大きな啓示をうけましたよ。おそらく，今の林産試験場の基礎を築いたのは，小林さんと黒田先生じゃないですか。生みの親，育ての親でしょう。そして，千広林務部長は中興の祖だ。確かに先見性のあるビジョン多き人だ。

かって，私の娘とフィンランドの試験場を見学したが，林産試験場は決して世界にヒケをとらないと思っています。特に，カラマツの試験，研究は世界一だと思っている。ところが一般的には認識がない。また，林産試験場は，今，小径木しかないから，これに全力投球してくれたことに対して，非常に大きな功績だと思っている。

今後，バイオマス，バイオテクノロジーについて，農業との対話が必要な時代が来る。林業と農業とのタイアップにおいて，関連産業，地域産業のためにも，是非やってもらわねばならないと考えています。

さらに，今後，光沢・年輪・美，これに対する要求は時代とともに進みますね。とかく，林業家は保守的で感性が鈍いので，試験場，需要者の方々の豊富な情報を山元に十分与えて欲しい。林業家は，これに応えねばならない。

註：以上のお話は，２時間半にわたる貴重なものであるが，編集担当者の文責として，まとめさせて頂いた。なお，石井社長のご意見は，林，昭和58年11月号の座談会のなかでも述べられている。